

(様式第4号)

上田市総合計画審議会（第4回市民・交流部会） 会議概要

1 審議会名	上田市総合計画審議会（第4回市民・交流部会）
2 日時	令和7年6月26日 午後2時15分から午後3時50分まで
3 会場	市役所本庁舎 5階 大会議室
4 出席者	中村彰部会長、山本幸恵副部会長、西入直喜委員、柳沢裕子委員、安藤健二委員、井上拓磨委員、矢島富士雄委員、田中舞委員、葛西剣介委員、直井恵委員
5 市側出席者	小野沢総務部長、鎌原財政部長、堀内市民まちづくり推進部長、小林文化スポーツ観光部長、翠川丸子地域自治センター長、酒井武石地域自治センター長、片山秘書課長、和根崎櫓復元推進室長、清住政策企画課長兼学園都市推進室長、宮島広報課長、市村DX推進課長、山崎総務課長、小林行政管理課長、徳田情報システム課長、根岸財政課長、山岸財産活用課長、林税務課長、柳澤収納管理課長、平田市民参加・協働推進課長、伊藤移住交流推進課長、大森人権共生課長、斎藤市民課長、春原文化政策課長、半田丸子地域自治センター次長兼丸子地域振興課長、鈴木武石地域自治センター次長兼武石地域振興課長、白鳥国民スポーツ準備室長、堀内交流文化芸術センター副館長、山寄市立美術館長、中沢生涯学習・文化財課政策幹、町田広報課係長、櫻井市民参加・協働推進課係長、小井戸人権共生課係長、宮下文化政策課係長、宮下スポーツ推進課係長、清水観光シティプロモーション課係長、小林住宅政策課係長、宮下真田地域振興課係長、東城政策企画課担当、中澤政策企画課担当
6 公開・非公開	☒ 公開 ・ ☐ 一部公開 ・ ☐ 非公開
7 傍聴者	0人、0人
8 会議概要作成年月日	令和7年9月12日

協 議 事 項 等
1 開会（春原文化政策課長）
2 あいさつ（中村部会長）
3 議事 (1) 第三次上田市総合計画 前期まちづくり計画（案）について (事務局) 資料に沿い、前回意見及びパブコメへの対応状況（第1編）について説明 (委員) 「1-2-2 女性と男性が互いに尊重しあい～」の表現について、ここはジェンダーギャップ解消の項目であろうかと思うが、どのような表記がよいか皆さんの意見を聞きたい。 (委員) 個人的にはそれほど「女性、男性」という表記へのこだわりは感じていない。むしろ「女性と男性が互いに尊重し合い～」とあるのに、その後ろでは「男性と女性～」の順で表記されている方が気になる。女性を最初に表記することについて、社会課題へ意識が向いていると好意的に受け取る人もいれば、あえて女性を前にしていると感じてしまう人もいるのではないかと。あえて「男性」「女性」と書かずとも、先ほどのご意見のとおり「一人ひとり」や「全ての人が」といった表現でも伝わるのではないかと。思う。 (委員) 今の意見に加え、ここで考慮した方がよいのは「女性や男性に分けられない方」をどう捉えるかという事だと思う。「男女」だけでなく、もっと高いところで性を区分するようになっている時代に、どうしていくのかきちんと出さなければならないのではないかと。またもう一点、「結婚、妊娠、出産」と書かれた項目があったと思うが、「結婚」という形でなく

でも「同性婚」を含めそういうものがあるということを、どこまで配慮しているのか。多くの方が目にする計画として、それをどう捉えていくかは議論すべき課題だと思う。実際に困っていて結婚もできない、という状況の方がたくさんいるので、まちがどう受け入れていくかという事だと思う。

(副部会長)「男性・女性」という区分に関しては、学校においても配慮しなければいけない時代になっている。「人間」が「人間」を尊重し合っているまちが住みやすいのではない。男性や女性、中間の立場で悩んでいる方、皆が人間という存在として尊重し合えるのが一番の暮らしやすさだろう。男性・女性・中間のどれかといった目線で見のではなく、人として尊重し合うことに重点を置いていくことが大切ではないか。また「結婚・妊娠・出産」について、これから意見が出ると思うが、結婚していなくても子どもを育てている方もいるし、結婚をしないで子どもを望んでいるという方たちもいるので、「人として」「人間として」尊重し合えたり、お互いの事を理解し合えたりよい。「男女共同参画」についても、その人にしかできない仕事があったり、個性や特徴があると思うので、その辺を重視して考えていけばよいのではないかと。

(委員)「人権問題」か「社会課題の解決」で考えたとき、おそらく「1-2-1」が「人権問題」だと思うが、「1-2-2」にも「人権の尊重」が入っているためややこしい。市の説明のとおり「1-2-1」は「LGBTも含め一人ひとりの人権が尊重される社会の実現を目指しましょう」というもので、対して「1-2-2」はどちらかと言うと「女性と男性のギャップは社会課題であり、解決が必要」というもの。「1-2-2」を「一人ひとりがお互いを尊重し合い」といった表記や、副題にある「性別にかかわらず能力を発揮できる社会の形成を促進する社会の実現」といったタイトルにすることでよいと思うが、そうした場合、内容に男性と女性の問題しか書いていないといった問題が出てくるように思う。もし書くなら男性女性だけではなくLGBTの問題も含め、書き換えなければいけないのではないかと。副題を変えるとといったことでもよいかもしれないが、そうすると読んだ時の違和感が余計にある気がする。

(委員)今の発言と同じ感覚である。「1-2-2」は単純にジェンダーギャップに関する事だと思う。就職の場などでの男女の差を埋めるような取り組みが「1-2-2」では書かれているのだろうと認識している。しかし「女性と男性だけでよいのか」といった点は「1-2-1」で補う、ということにかなり違和感があるが、ではどう表現したらよいのかという点と悩ましい。

(委員)「1-2-2」にLGBTも含めるとなった場合に、指標に「審議会の委員に占める女性の割合」以外の指標も盛り込んだほうがよいのか。また『「審議会の委員に占める女性の割合」を40%以上に引き上げる』はどういう文言にすればよいのかという問題もある。「1-2-2」は「女性の課題を解決していこう」という、女性の経済的ギャップ、社会課題、政治活動なども含めたまちづくりなどへ女性の進出を男性と同じにしようという上田市の強い意志の表れだと思う。指標の表現について、女性をどうするのか、LGBTの割合にするのか。それはある意味、「1-2-1」で包含していると思う。LGBTの問題や「誰もが尊重される社会の実現」は、おそらく「1-2-1」で包括できると思う。ただし、市民がどう感じるかという点で、タイトルだけの問題でも別によいのか、表現をどう変えていくか、となった時に悩ましい。ここで「性別に関係なく」みたいな文言が入っていれば、整合性がとれると思うが、すごく難しい。

(委員)たしかに「1-2-1」で扱われているものだと思う。やはりタイトルの問題かもしれないし、男女共同参画社会という概念自体をもっと国のレベルで説いていかないといけない問題だろう。今、世界では「クィア」という言葉を使う。映画の中でもクィア賞というものが登場したりしている。脱中心化というか、今までの概念を越えていく考えで、この「男女差が無く」という事も加えていかないといけない。今言われたように、数値目標を掲げてやっていく事はすごく前進だと思う。しかし根本的にもっと深掘りしないといけないものがあると思うし、このタイトルに違和感があるという意見があった通りで、世に出るとさらにその意見が出ると思うので、何かよい表現を見つけられるとよいのではないかと。

(委員)表現だけを変えればよいと思っはいるが、表現を変えても中身に「女性・男性」と出て

くるのが根本的に変えなければいけない問題だが、そこまでやったほうがよいのかどうか。委員が言った通り、LGBT や性別の認識の問題は実際にあると思うが、男性や女性と認識している人が多いのも確かだろう。それは個別に考えていくべき問題だと思っており、全てを「男性・女性」と言ってしまうのは考えていない。タイトルだけ変えるなら簡単だと思うが、中身は男性と女性になってしまうところへ LGBT の観点を足せばそれで解決できるのかは、考えないといけない。

(委 員) 皆さんの言っている事はどれも共感できる。私自身としては、男女共同参画社会を今まで改革推進してきた方たちのおかげで、ひと昔前よりだいぶ改善されていると思う。男性と女性の差別といった事から社会の疑問が始まったので、断定はできないが、この場所では「男性と女性」という言葉があってもよいのではないか。まだ男女格差が解消されていない事もたくさんあると思う。男性と話していると「そうではないな」と思う事もあるし、男性は女性の事を分からない事も多い。そういう中で、あえて「男性と女性」という言葉を入れてもよいのではないか。

(委 員) ここまで計画素案が出来上がっている中、こういう話をするのは恐縮だが、計画を市民の皆さんに理解してもらうためにこれだけ審議会の中でも話題になっている訳で、その中でどれだけ市の行政として真剣にこの議題に関わっていくのかを示す内容だと思う。ただし今言われているように、市民としても色々な捉え方があると思う。委員の皆さんはそれぞれの内容についてよく知っておられるが、初めて総合計画を目にする一般市民が、男女共同参画や男女平等、職場での男女差など、読んで分かりやすい表現かどうかという事が難しいと思う。そこを計画として示す訳なので、文言を変えというと、男女平等や多様化にすれば分かりやすいと思うが、どこまで一般市民が課題を理解しているのか疑問に感じる。少し視線を「分かりやすい」というスタンスに持っていく事も必要なのではないか。

(委 員) 「ジェンダーギャップのない社会の実現」という表記であればどうか。今、男性と女性で社会的なギャップがあるというのは事実であり、それが「審議会に占める女性の委員の割合」などに入っていると思うが、「ジェンダーギャップのない社会を目指す社会の実現」と書いてあれば、イメージとしてどうかお聞きしたい。

(委 員) 性差によって個性の能力が発揮できないというのが問題なので、最初の文言が消されて差が無い文言に変わるのであれば、よいのではないかなと思う。審議会に占める女性の割合という指標があるが、審議会に女性の委員が増えれば女性の意見が増える。したがってやはり文言は何としても変えたほうがよい。

(委 員) 「ジェンダーギャップのない社会の実現」にするか、「〇〇ギャップのない社会の実現」にするか、そういう「ギャップのない社会を目指そう」という話だと思う。性別や LGBT の観点はまた別の課題であり、どこかに盛り込まれるべき課題だと思う。ただし女性と男性のように、特に経済分野でギャップが生じてそれが男女の格差がさらに広がっていくのは解決しなければいけない問題だと考えている。タイトルがふんわりしていると余計に議論を巻き起こしてしまうので、社会課題の部分を「ジェンダーギャップ」のようなタイトルにするのがよいのではないか。これだけ大きく書いてあるという事は、1 編でこれを解決したいと思っている表れだと思っているので、それはそれで内容は問題ないと私自身は考えている。タイトルだけはどのような形がよいのか女性の意見を聞いてみるのもよいのではないか。

(事務局) 私共の部署でも大変悩んだ。「男性・女性」だけの表記でよいか議論したが、明確な答えは見つからず、国や県の法律等で使っている表題を従来通り使わせて頂いているという状況。皆さんの意見を聞き、表題を変更する事に特に問題はないと思うが、委員から話があった通り、社会課題として捉える認識でいるので、「ジェンダーギャップのない社会の実現」というタイトルの提案を頂き、個人的にはそれでしっくりくるように感じている。

(委 員) 非常に道のりが長い項目だと改めて感じた。P36 『男性は仕事、女性は家庭』という性別による固定的な役割分担意識は薄まりつつありますが～』についても、数値等が出てきているのかもしれないが、暮らしていく中では決して実現していないように思う。指標がな

ぜこうなっているかなど、色々聞きたい事がたくさんあるので、この総合計画が出てからも上田市の今後の10年を見ていきたいと思う。タイトルについても、そうやって変えて頂いた方がよいと思うし、国が言っている事をそのまま下ろす必要はないと思うので、上田市なりにこの課題についてどうやっていくかを考えていかないといけないと思う。

(副部会長) 中身については最後の方に「誰もが仕事や家事、育児～」や「すべての人の権利が～」とあるので、まずはタイトルの部分のみ「男性と女性が」「女性と男性が」という表現を取り、「ジェンダーギャップのない社会の実現」「誰もが能力を発揮できる社会の実現」のような「ギャップのない社会」と表記したらどうか。難しい問題であり、上田市がここを目標としてやっていく中で色々な案も出てくるだろうから、まずはタイトルのところから始めればよいのではないかな。

(委員) おそらく「ジェンダーギャップのない社会の実現」だったらこのままでよいし、「誰もが」という言葉を使うのであれば、下の副題にまず「ジェンダーギャップの問題をこの10年で解決しようと思っています」のような文言を入れ、その中で「ジェンダーギャップにフォーカスします」という表現にする。まず「私たちのジェンダーギャップが一番大きな解決すべき問題だと思っているので、まずはそれをやります」と書けば、下がある程度つながってくるのではないかな。おそらく「誰もが」のほうが、どんな人でも読み取れるので、まずジェンダーギャップを解消するのだという書き方にするか、どちらかだと思う。

(委員) 今後男女共同参画の委員会が開かれていくと思うが、そこで議論されやすいベースになるとよいのではないかな。男女共同参画に向けた基本計画の策定に当たり、上田市自体も変わっていくと思うが、それを踏まえこれからも議論され続けるためのベースにしていくべきではないかな。

(部会長) ある程度、方向性やキーになるべきものが出てきたが、事務局でまとめる事ができそうか。

(事務局) タイトルの変更について検討させて頂きたい。「女性と男性が」から「誰もが」という表現に変えて、その下に「ジェンダーギャップを解消し、性別にかかわらず」という表記もあるので、そこにつながる表現にするという事でよろしいかな。

(委員) 中間見直し時に審議してLGBTの問題を入れることができるのだとすれば、「誰もが」というタイトルがよいのではないかな。「一人ひとり」でもよい。ただし、今回は、男女差のジェンダーギャップが問題になっているので、まずは「ジェンダーギャップにフォーカスを当てます」のような説明があったほうが「誰もが」というところにつながると思う。「ジェンダー問題だけに関わらない問題も、上田市としては調査に努める」といった一文をどこかに入れておけば、一応全部網羅できる。

(事務局) タイトルのところは「誰もが」に変更という事で認識した。中身についても追記を検討したい。

(事務局) 資料に沿い、前回意見及びパブコメへの対応状況(第6編)について説明

(委員) 全体会で、P126「各主体に期待される主な役割分担」の「スポーツに関心を持ち『みる』」の記載について、視覚障がい者への配慮として「みる」という表現を選んだのかという指摘があった。確かにそうだと思っており、「聞く」「触れる」など様々あると思うが、この文言についても一つにし、「スポーツに興味関心を持って、積極的にスポーツ活動やイベントに参加します」のような表現に変えると、解消できるのではないかな。今、上田市第二次スポーツ推進計画の5年目の見直し時期となっており、その中でも「スポーツを『する・みる・支える・つくる・つなぐ』」という文言があり、これは国や県で使われている文言が継承されているものと思うが、スポーツ推進計画の中でも意見を出しながら変更していきたい。また、基本施策1②に『『みる』スポーツの機会を提供し、～』とあるが、少し含みを持たせることで障がいを持っている方にも対応できるのではないかな。スポーツ推進計画は障がい者スポーツについても部門で作っているのだから、そこでも検討したい。

(委員) 子育てをしている方と接する機会が多いが、令和9年度に向けた部活動の廃止が、特に今年の1年生だと、2年後はどうなるか分からないといった問題があるかなと思う。色々な

事情から地域スポーツ化しなければいけないのは理解しているが、お母さん方と話していると「中学校の部活だからこそ始めやすかった、地域スポーツだと始めるのを躊躇してしまう」といった話を聞く。中学進学が部活を始めるきっかけであったが、地域スポーツ化する事でスポーツを始める機会が減ってしまうのではないかな。始めるきっかけは「友達やるから自分も入ろうか」でもよいと思うが、スポーツを始めるのが若年化しサッカーなども中学校だと相当うまい子がいるような状況の中、「部活であればやってみたい」といった子たちの機会を奪うことになりかねないと思う。地域クラブ化するのはよいが、橋渡しを丁寧にやらないと、逆にスポーツをする人が減ってしまうのではないかな。このままでも構わないが、そういった課題についても、もう少し強く書いたほうがよいなら修正したほうがいい。

(委員) おっしゃる通りだと思う。地域移行は教育委員会で取り組んでいるが、子ども達とスポーツの出会いはずごく大事で、小学校から始まっているし、中学校は今そういう状態になってしまっている。アンケートでも、ひとつの競技を目指す子もいれば、色々な競技を楽しみたい・体験してみたいという子もいる、といった結果が出ている。地域移行で中学校に部活動がなくなった時にどうやって対応するか検討が進められており、長野市や松本市ではもうやっているが、上田市のスタイルで対応できるように、という話は聞いている。今後方向性が披露されると思うので、話を聞きながら推進計画にも対応していかなければいけないだろうし、総合計画の部門計画もあるので、今後でもできるようになるのではないかと予想している。

(委員) 指標として「中学校のスポーツ率の維持」または「部活動の維持」といったものを入れた方がよいのではないかな。地域化によりスポーツを始める人が減ってしまったら本末転倒なので、そこに立ち返れる指標設定はしておいたほうがよい。部活動が地域クラブに移行した時に「スポーツをする人が減ってしまった」で留まるのではなく、「指標として減ってしまったからこれはまずい、だから維持はさせよう」と対応するのでは大きな差だと思う。

(委員) 「スポーツ実施率」という「個人がどのくらいスポーツをしているのか」といったデータは取っている。県にもあるし、おそらく上田市にもそういうデータがある。お話のあった「中学校のスポーツ活動の実施率」といった指標はよいと思うので参考にしたい。

(委員) 資料3の2番について、外国籍の方の日本語教育についてある程度触れているが、実際に困っている事態が全く解消されていない。「外国籍の子ども達の分野」と「学校分野」について総合計画の部会が別であるため、教育委員会関係の方は一切ここに来ていない。具体的に2番の意見では、「教育分野について『5-1-1』に反映してほしい」という事を言った。P114に「⑤市内で増加している日本語での～」との記載があり一歩進んだが、それ以上は進んでいない。現状の話をすると、まず外国籍市民が5,000人を超えた。ピークは平成18年(2006年)の5,023人。この時はブラジルなど南米の人達が中心で増え、そして色々な経緯をたどって減少し3,000人になり、急速にまた伸びて5,000人を超えた。今後もこの5,000人が続いていくと思っている。2027年になると育成指導という制度になり、今まで技能実習生でやってきた人達が特定技能1あるいは2で日本へ来るとみられ、特定技能が随分増えると予想される。特定技能2だと家族を呼べるので、日本語力がゼロに近い子ども達の増加が予想される。こうした2年先だけでも、学校の体制ができていない。現在の体制について改めて説明すると、上田市には4つの小学校と2つの中学校に日本語教室がある。それぞれ懸命に日本語がゼロレベルに近い子の教育をしている。現場の先生も精一杯であり、我々ボランティアもやれる範囲は超えている。週に3回入るという事は非常に苦しいが、それでもやっている。そういう現状を踏まえてこの意見を書いた。プレスクールは無理かもしれないが、お金をかけてもプレクラスを作してほしい。「上田に來たが日本語が全然分からない、学校の習慣も文化も分からない、あいさつすらできない」そういう子ども達が來た時の、ひとつのクラスを作してほしい。「プレクラスを出てきて日本語がある程度できるからお願いします」という事で近くの小中学校で勉強を続けていける、そういうプレクラスを作してほしい。たった一つのクラスを作ればよいだけ。教室はたくさ

んあるし、先生は何とか工面すればできる。今ある6校の日本語教室だけでは到底無理。もう一つ、松本でやっている方法だが、支援員を派遣する方法もある。とりあえず5、6人の支援員を市教委で抱えてセンターを作り、新しく2人来たら呼びこんで様子を見る。そして支援員を派遣しないと無理という段階になったら、センターから派遣する。ある程度慣れてきたら、その学校に任せて次へ派遣する、といった制度。こうした、プレクラスを作るか、あるいは学習支援員という日本人の先生を抱えて派遣する、といった事を提案している。しかし、お金がないのでそんなのはどうでもよいという反応。現実に対応できる計画であってほしい。AMUとしても全力でやっている。本当にボランティアをこれ以上派遣できないくらい一生懸命やっている。教育委員会は別の部会でありながら「5-1-1」に入れてもらっただけでもありがたいが、その上にもう少しお金をかけて、私が提案しているような事を少しでも改善してもらいたい。

(事務局) 本日午前中に会議があり、そこで上田市内の外国籍の市民の方の状況の報告があった。委員が言った通り、特定技能の外国籍の方が非常に増えている。今後、本国から子どもを呼んで定住していくという状況が見えているので、教育委員会とも連携しお互いが連携して必要な対応を取るようにと申し上げた。先ほど委員が言われた状況も、担当課長より報告を受けているし現場の苦勞も分かる。現場の先生方やAMUの方たちが精いっぱいやっている苦勞もよく知っている。また市でもオープンドアスクールの設置について教育長と一緒に県教委のほうへ行き、ぜひ上田市で抱えている非常に重要な課題でありやらせて頂きたいと申し上げた。ご指摘頂いた事は教育委員会としても十分分かっているし、具体的な話は改めてAMUの皆さんのご意見を伺いながら、教育委員会と連携して対応して参りたい。総合計画は一番の上位計画になるため、個別具体的などところで足りないところはあるが、委員が言った事は十分市としても分かっている、さらに具体的な計画を作る段階で、一番は人材をあらゆる手段を尽くして今後確保していくという方向で教育委員会も考えていると聞いており、ご理解頂きたい。

(委員) 大変心強い答弁を頂いた。これから市教委とも誠実に話をしなければいけないし、現場についても見て頂き、知ってほしいと思う。オープンドアスクールについて、外国籍の子ども達プラス不登校などの子ども達も含めて、上田市独自のオープンドアスクールという事で進んできている。そこもより一層、外国籍の子ども達も大切にもらえるような方向で検討して頂きたい。総合計画は大きな計画なので、各論はそれぞれ工夫してやっていくという事で話を頂いた。それを信じ私たちも力を合わせてやっていきたい。

(委員) 「6-1-2」で副題に『『育成』を基本理念とし〜』とあり、これはサントミューゼを始めとする大型劇場の育成であると承知しているが、民間の小劇場でも連携してほしい。P124基本施策3①に「サントミューゼを核に〜」との記載があるが、そこに一言「民間劇場」も入れるのはどうか。文化庁では最近映画が幅広いジャンルで定義されている。上田は民間の劇場が割と盛んであり、そこに対する施策などを盛り込めるのかどうか。また、先ほど部活の地域移行も出たが、そこも同じく民間の劇場が地域移行で文科系の部活動の継続をしてきたりしているので、今後そうした連携みたいなものも加えられたりするのか。

(事務局) 第3期の運営計画を策定する年で、昨日も第一回の運営委員会があり、地域との連携の話が出たが、地域との連携はこれからますます必要になると考える。これまでも連携はあったが、希薄になっているという意見も出た。その事について市も課題と考えている。ご指摘の点について事務局とも協議し検討したい。

(2) その他

4 閉会 (春原文化政策課長)